

ローカルなスポーツジャーナリズムと 地域スポーツのメディア化に関する一考察 A Study on Local Sports Journalism and The Mediatization of Local Sports

松実 明
Akira MATSUMI

上智大学院 文学研究科 新聞学専攻博士後期課程
Doctoral Program in Journalism, Graduate School of Humanities, Sophia University

要旨・・・本発表は、スポーツのメディア化（The Mediatization of Sports）を軸にして、郷土紙のスポーツジャーナリズムの機能と役割を考察することを目的とする。郷土紙のスポーツジャーナリズムは、地域住民とスポーツの関係や地域メディア界と地域スポーツ界の関係に応じた形態をとり、色あいをおびている。それは、地域スポーツのメディア化の過程とその程度を反映している。スポーツジャーナリズムが発達して、メディアとスポーツの間で相互作用と相互依存が生じると、スポーツにおけるスポーツジャーナリズムの重要性が大きくなり、スポーツのコミュニケーションの仕方には変わったところがある。本研究は、スポーツのメディア化の程度が高まる過程のなかで、スポーツ界が従わなければならなくなったメディアロジックのうち、①スポーツジャーナリストの誕生②スポーツ欄の新設③スポーツ専門部署の発足という「専門性」から構成されるメディアロジックを検出した。これは、スポーツジャーナリズムの発達に顕著な影響を及ぼしたことがわかった。

キーワード スポーツジャーナリズム、スポーツ報道、メディア化、メディアロジック、地域メディア

1. 研究の目的

今日、スポーツは老若男女を問わず世界中で親しまれているが、スポーツが普及した背景には、メディアとスポーツの関係がある。この関係には、メディアがスポーツに関与することによってスポーツが普及したという側面と、メディアはスポーツに関与して消費者の歓心を買うという側面があると考えられる。その関わり方は事業活動と言論・報道活動に区別される。メディアの事業活動は、新聞社、出版社、放送事業者などがスポーツ大会を主催または共催したり、スポーツ団体を所有したり、そのスポンサーになることである。これは、メディアが事業活動を通じてスポーツに自律的に関与しているのも事実である。もう一方の言論・報道活動については、18世紀にみられた初期のスポーツ報道では、メディアはスポーツの道具として、試合の告知とその結果を伝えた。その後、メディアはスポーツから独立して、新聞や雑誌は出来事としてのスポーツを文字と写真により伝えて、ラジオは今、競技場で行われているスポーツをアナウンサー、解説者の声により伝えて、テレビはリアルタイムのスポーツを音と映像により伝えてきた。この自律的な活動はスポーツジャーナリズムと呼ばれる。新聞と雑誌はスポーツを楽しく、おもしろく読ませる立場から、記者の専門的な視点から技術を評論したり、スポーツの正常化を問いかけたり、スポーツの記録を伝えたり、インサイドストーリーを掘り起こしてきた。またラジオとテレビの実況中継はリスナー、視聴者に知識を提供したり、実際の試合における選手の有り様、ボールなどの動きを伝えたり、試合を批評的に解説してきた。

このように、メディアとスポーツは親密な関係であるが、あくまでも双方は自律的な機構であるから独立している。それは「新聞やテレビに代表されるマス・コミュニケーションの発達とスポーツの発展の相互作用の結果、メディアにおけるソフトとしてのスポーツの重要性が非常に大きくなり、ライブスポーツのメディア化が広範囲に生じた」¹。しかしメディアがスポーツに依存したり、スポーツがメディアに依存したり、とメディアとスポーツの相互依存関係も否定できない。たとえばスポーツ報道の増加は読者、聴取者、視聴者の関心を引きつけ、部数増、高聴取率、高視聴率につなげようという経営戦略の一環である。またメディアの事業活動は、競技団体がイベントを興し、継続させる上でメディアに依存していることの表れでもある。

¹橋本純一「スポーツとメディア」中村・高橋・寒川・友添（編）『21世紀スポーツ大事典』（大修館書店、2015年）、p418。

メディアに報じられれば、競技の PR 効果は絶大になる。つまりスポーツ報道はメディアと競技団体の相互依存関係にある²。今日では、スポーツにおけるマス・メディアの重要性が大きくなったが、私たちはスポーツにおけるメディアの影響を黙視するのではなく、どのようにしてスポーツジャーナリズムの質的向上を図るべきかを考えなければならなくなってきた。

スポーツのメディア化とは、メディアとスポーツの間で相互作用と相互依存が生じて、スポーツにおけるスポーツジャーナリズムの重要性が大きくなる過程である。その過程のなかでは、メディアがスポーツに影響を及ぼしたり、スポーツがメディアに影響を及ぼしたり、とスポーツジャーナリズムはメディアロジック³とスポーツロジック⁴の影響下にあるが、そもそもメディアにおけるソフトとしてのスポーツの重要性は必ずしも大きいとは限らず、またメディアロジックの強弱およびスポーツロジックの強弱は一定ではないから、スポーツのメディア化の過程やその程度は時代や地域によって異なる。

たとえば日本では、郷土紙は、スポーツのメディア化の程度の差をみられるメディアの一つである。現在、人口減少や地域経済の衰退を背景に郷土紙を取り巻く経営環境は容易ではないが、今日でも比較的狭い範囲のなかに複数の郷土紙が発行されている地域もある。しかし郷土紙の発行が盛んな地域で発行されているから、必ずしもその新聞のスポーツジャーナリズムも活発であるというわけではない。郷土紙は、一つの都道府県内の一地域を頒布エリアとしており比較的狭い範囲で購読されるから、その地域にスポーツが盛んな土地柄があるか否かをスポーツ欄に明瞭に反映させる。そのため郷土紙には、きめ細かな地域スポーツを扱うスポーツ欄がある新聞からスポーツ欄の大部分は通信社と全国紙が配信する記事に依存する新聞、そもそもスポーツ欄がない新聞まである。スポーツ欄がなくスポーツジャーナリストがいない郷土紙もときに地域スポーツを扱うにしても、その不定期なスポーツジャーナリズムは、スポーツ欄があってもスポーツジャーナリストがいる新聞のスポーツジャーナリズムに対して活動の程度が同等ではない。

本発表で問題にしようとしている点は、スポーツジャーナリズムが、地域によって、まるで違う目的に奉仕しているのはどうしてなのかということである。本発表の主題は、スポーツジャーナリズムは常にそれが活動している社会の、メディアとスポーツの関係に応じた形態をとり、色あいをおびているものだという点にある。とりわけ、それはスポーツのメディア化の過程とその程度を反映しているものなのである。発表者は、スポーツジャーナリズムを体系的に理解するには、スポーツのメディア化の過程とその程度を理解することが肝心だと信じている。

メディア化には、拡張 (extension)、置換 (substitution)、融合 (amalgamation)、順応 (accommodation) という重要な過程がある⁵。それらは、スポーツのメディア化の場合には、スポーツがメディアロジックに従って生じたものと、メディアがスポーツロジックに従って生じたものの両方があるが、スポーツにおけるマス・メディアの重要性が大きくなり、スポーツがメディアロジックに従わなければならないとなると、段々メディアロジックがスポーツロジックより優先されるようになった。しかしメディアロジックに従ったものとスポーツロジックに従ったものを区別することは容易ではない。なぜならば、スポーツ産業の領域が拡大して、それぞれの市場が成熟していくに従って、メディアと各領域のビジネスにおける結びつきが活発化した⁶ことを背景に、メディアロジックが事業活動のメディアロジックと言論・報道活動のメディアロジックに離合したり、メディアロジックがスポーツロジックの一部を構成するようになってきたからである。それは、スポーツジャーナリズムの機能と役割にも影響を及ぼすようになった。そこで、スポーツジャーナリズムの機能と役割をみるには、メディア化のなかで生じた拡張、置換、融合、順応という事柄に注目しなければならない。

スポーツはグローバル化したのが、ブロック紙は依然一地方のみ、県紙は一つの県内のみ、郷土紙はさらに狭い地域のみで流通する。テレビ、ラジオのローカルスポーツ番組も再放送を除くと県域放送にとどまる。したがってローカルなスポーツ情報を求める人が、その地域外からこれらのメディアに接触して、その情報を得るにはコストがかかる。これに対してインターネットは、ローカルなスポーツ情報を求める人が世界中どこからでも Yahoo!ニュースなどのニュースサイト、その他のウェブサイト、新聞雑誌の電子版などの閲覧を通してローカルなスポーツ情報へアクセスすることを助けるから、インターネットには、ローカルなスポーツ情報を伝える適性がある。しかし、そもそもその情報の多くは新聞社、放送局が提供、配信したものである。それではこのスポーツジャーナリズムはどのように評価できるだろうか。

本研究は、そのような問題意識をもとにスポーツジャーナリズムを「活動」として見る視座と「組織」として見る視座に依

²中小路徹「スポーツと新聞」『21世紀スポーツ大事典』、前掲、p.758。

³専門性、商業主義、技術。

⁴スポーツ組織、スポーツ振興施策、商業主義。

⁵Sig Hjarvard, *The Mediatization of Society: A Theory of the Media as Agents of Social and Cultural Change*, *Nordic Review* 29(2008)2, p.110.

⁶山下秋二「スポーツ産業とスポーツビジネス」『21世紀スポーツ大事典』、前掲、pp.172-173。

拠して、郷土紙のスポーツジャーナリズムの実態を明らかにするためスポーツジャーナリストにインタビュー調査を行い、彼らの仕事に対する意識を見ていくこととする。そして本調査から得られた知見を手がかりにして、調査対象紙のスポーツジャーナリズムには、「活動」の視座からどのような「機能」があるのか、また「組織」の視座からどのような「役割」があるのかについて、スポーツのメディア化を中軸に据えて考察する。

2. 研究の方法

(1) 調査対象紙

日本の郷土紙に相当する **Local newspaper** は世界中で発行されている。日本では、郷土紙の日本新聞協会加盟社は 26 社【図表 1】そのなかから 1966 年に日本で初めてスポーツ宣言都市を表明した北海道苫小牧市にある『苫小牧民報』（1950 年 1 月 25 日創刊）を研究対象にした。『苫小牧民報』（以下、苫民）は夕刊紙（自社公称 60,000 部 世帯普及率 60%）である。姉妹紙には夕刊紙『千歳民報』（1963 年 7 月 20 日創刊）もある。

インタビュー当時、スポーツ部にはデスク 1 名と記者 3 名が所属しており、スポーツカメラマンは記者が兼務する。姉妹紙にもスポーツ記者が 2 名いる。胆振東部・日高地域は幅広いから、スポーツ部記者は専ら市内のスポーツを扱い、市外のスポーツは各支局員が担当するとともに、一部は『日高報知新聞』を頼る。全国のスポーツニュースは時事通信社から配信される。スポーツ欄は通常見開き 2 頁であって市内のスポーツと全国のスポーツを扱う。地域欄「まちからまちへ」は市外のスポーツを扱う。大きなスポーツイベントの際には特別紙面を編集して 1 面や社会面でもスポーツを扱う。

【図表 1】日本新聞協会加盟の郷土紙一覧

地域	郷土紙	地域	郷土紙	地域	郷土紙	地域	郷土紙
北海道地方	室蘭民報社	東北地方	岩手日日新聞社	中部地方	南信州新聞社	中国地方	宇部日報社
"	十勝毎日新聞社	"	北羽新報社	"	市民タイムス	九州地方	夕刊デイリー新聞社
"	釧路新聞社	"	荘内日報社	"	東愛知新聞社	"	南海日日新聞社
"	苫小牧民報社	"	米澤新聞社	近畿地方	夕刊三重新聞社	"	八重山毎日新聞
"	函館新聞社	"	いづき民報社	"	紀伊民報社	"	宮古毎日新聞社
東北地方	陸奥新報社	関東地方	桐生タイムス社	"	熊野新聞社		
"	デーリー東北新聞社	中部地方	長野日報社	中国地方	島根日日新聞社		

(2) 調査概要

前述した研究課題に取り組むためには郷土紙のスポーツジャーナリストの仕事に対する意識に視点を置いて研究を進めていくことが妥当であると考えられる。したがって本研究は苫民を研究対象にして、そのスポーツ部部長とスポーツ部主任の仕事に対する意識を見ていくため、2016 年 2 月 4 日に苫小牧民報社本社会議室において執行役員編集局次長兼スポーツ部部長 広江渡氏（当時）とスポーツ部主任 石川鉄也氏（当時）にインタビュー調査を行った。あわせて、北海道の冬のスポーツ資料を一般的に展示する札幌ウィンタースポーツミュージアム、戦前からのアイススケート、アイスホッケーに関する資料を展示する苫小牧市美術博物館、アイスホッケーの資料展示に特化した白鳥王子アイスアリーナ資料展示室の利用などを通して苫小牧のアイススケート史とアイスホッケー史を知るための資料を収集した。

3. 得られた知見

(1) 事業活動

苫民は、地域メディアとして新聞発行のほかにもスポーツイベントの主催・共催・後援といった事業活動を通じて地域スポーツ文化の発展に直接関与している。【図表 2】また、その間接関与には、たとえば 1985 年 11 月に開館した苫小牧市博物館（現在、苫小牧市美術博物館）展示室「スケートのまち苫小牧」に協力するなど地域スポーツ文化の伝承者という立場からスポーツレガシーを維持することが挙げられる。

【図表 2】苫小牧民報社の主要なスポーツイベント

1962(昭和 37)年 6 月	大鷲旗争奪苫小牧朝野球大会(第 1 回)
1973(昭和 48)年 8 月	とまみん杯道南オープンゴルフ選手権競技(第 1 回)
1980(昭和 55)年 10 月	とまこまい市民マラソン(第 1 回)
1992 年(平成 4)年 7 月	中学駅伝苫小牧大会(第 1 回)

(2) 言論・報道活動

・初期のスポーツジャーナリズム

スポーツ報道は『南北海』⁷の1950（昭和25）年1月15日付け創刊号からみられるが、初めてのスポーツ記事は、アイススケート（「五百に45秒9内藤輝く大会新記録」）とアイスホッケー（「高校勢も續々」、「製紙、札クを一蹴」）である。発刊10日後の25日から開幕した第18回全日本氷上競技選手権大会と同年同月29日から開催した第5回国民体育大会冬季大会スケート競技会は、紙面をブランケット版に拡大して報道された。大会期間中に特別紙面が発行されたから創刊当時よりソフトとしてアイススケート、アイスホッケーの重要性は小さくなかった。1956年3月には、第28回選抜高等学校野球大会に苫小牧工業高校が初出場したから、独自取材するために自社記者を初めて阪神甲子園球場へ派遣した。同年6月9日には第7回東日本準硬式野球大会報道のため朝刊で発行した。このように、国体や地元チームの全国大会出場などの際には特別報道を行った。

1950年代、中学マラソン大会（1953年）や日胆選抜中学校野球大会（1954年）などを後援することを経て、1960年代には、複数のスポーツイベントを主催するようになった。【図表3】新聞はこれらを積極的に報道したが、依然としてスポーツジャーナリストはおらず、スポーツ記事は報道部記者が持ち回りで書いていた。しかしスポーツのニュースが次第に増加すると、1970年代後半に報道部記者の内から1名がスポーツ担当になった。それはスポーツジャーナリストの誕生を意味した。

【図表3】1960年代起源の自社スポーツイベント一覧

1960(昭和35)年7月	苫小牧市内バスケットボール大会(第1回)
1962(昭和37)年6月	大鷲旗争奪苫小牧朝野球大会(第1回)
1962(昭和37)年8月	民報杯争奪バレーボール大会(第1回)
1965(昭和40)年9月	民報杯争奪サッカー大会(第1回)
1966(昭和41)年3月	苫小牧民報杯争奪アイスホッケー大会(第1回)
1966(昭和41)年6月	苫小牧地区産業別ゴルフ大会(第1回)
1967(昭和42)年10月	苫小牧市民ボート大会(第1回)
1967(昭和42)年10月	苫小牧民報杯バドミントン大会(第1回)
1969(昭和44)年2月	苫小牧民報杯争奪中学校アイスホッケー新人戦(第1回)
1969(昭和44)年11月	苫小牧民報杯ママさんバレーボール大会(第1回)

・スポーツジャーナリズムの発達

以前から紙面のなかではスポーツを扱ってきたが、読者からの要望と常時10頁に増ページされたことを背景に1982（昭和57）年4月15日付け紙面からスポーツ面が新設された。スポーツ面の新設により、スポーツ記事が毎日掲載されるようになると、自社スポーツイベント、国際大会、全国大会、道大会などの比較的大きなスポーツ大会の結果だけでなく地区予選会などの比較的小きなスポーツ大会の結果も紙面に登場するようになった。

紙面が変化したように組織体制も変化した。1987（昭和62）年9月には、報道部は政治経済部と社会運動部に分離した。さらに2009年4月の組織再編成ではスポーツ部が独立した部署になった。スポーツ部の発足は、新聞社がスポーツに専従する記者集団を抱えることを意味する。それは、事実伝達という報道活動に言論活動も加えてスポーツジャーナリズムを活発にした。たとえばスポーツジャーナリストの専門的な視点から技術評を展開したり、インサイドストーリーを掘り起してスポーツのフィーチャーを書いたり、スポーツ界が抱える問題を訴えるようになった。また2000年2月28日付け紙面から常時スポーツ欄が1頁から2頁に増ページされた。それにより、それまでに存在していたスポーツ情報とは異なる質的变化が生じた。たとえば新聞は、競争性を主として遊戯性を従とする競技スポーツを専ら伝えているが、スポーツ記事を掲載できる面積が拡大したことにより、遊戯性を主として競争性を従とする生涯スポーツも伝えるようになった。生涯スポーツ報道の特徴は、試合結果や記録よりもスポーツを楽しむ人たちの姿を伝える方を重視することである。それは、写真に簡潔な説明文を添えるという体裁をなす。

・現在のスポーツジャーナリズム

スポーツ部の方針は、夏季のスポーツ欄では高校野球記事、冬季のスポーツ欄では小中高校生の部活動からアジアリーグアイスホッケー王子イーグルスまでのアイスホッケー記事が定番になっている⁸が、その日のトップ記事は、競技種目にこだわら

⁷ 『苫小牧民報』の前身は『南北海』である。その紙面はタブロイド判2頁。

⁸ ソフトとして高校野球の重要性は大きいだが、近年、高校野球は地元勢が地区予選を勝ち進めないこと及び全国高等学校選抜アイスホッケー大会（氷上の甲子園）が定着したことを背景に、アイスホッケーは、スポーツジャーナリズムにとって年間を通じて重要なスポーツになっている。

ず、タイムリーな話題を取り上げるようにする。

スポーツジャーナリズムは、競技スポーツ報道と生涯スポーツ報道に区別できる。一方の公式戦や公式大会を扱う競技スポーツ報道では、スポーツの競争性の観点から試合結果と記録を伝えることはスポーツジャーナリズムの役割のひとつである。メディアは、時代や社会に適したスポーツ選手を選び、スポーツヒーローやスポーツヒロインとして構築していく⁹。郷土紙も地域社会に適した選手（＝地元で所縁がある選手）を選び、ヒーローやヒロインとして構築するのではないだろうか。確かに個人競技の報道では、そのきらいがある。しかし団体競技の報道では、記事の主体は選手個人ではなくチームである。たとえば高校野球報道には、監督、選手、マネージャー、裏方などのフィーチャーもあるが、主たる記事は選手個人ではなく野球部が主体である。なぜならば読者の関心は選手個人の記録ではなく隣近所の学校、母校、通学先の野球部の試合結果にあるからだ。同様に王子イーグルス報道でもフィーチャーを除き、主たる記事の主体は選手個人ではなくチームにある。なぜならば苫小牧市は、王子製紙の企業城下町として発展してきた歴史をもつから市民生活のなかに「王子」が浸透している風土があるので、読者の関心は、地元出身選手の個人記録よりもチームの試合結果にあるからである。

もう一方のスポーツを通じて市民相互の親睦を図ることを目的とする非公式なスポーツ行事を扱う生涯スポーツ報道では、試合結果と記録を伝えることはさほど重要ではなく、スポーツの遊戯性の観点からスポーツを楽しむ人々の姿を伝えることはスポーツジャーナリズムの役割である。その報道では、記事の主体は、団体競技においてもチームではなく選手個人である。なぜならば読者の関心はチームではなく選手個人にあり、その記事は家族、友人、知人に読まれることを想定しているからである。このようにスポーツジャーナリズムは、地域住民とスポーツの関係に応じた形態をとり、色あいをおびている。

(3) 考察と結論

アイスホッケー、スケートなどの氷上のスポーツが盛んな土地を「氷都」という。日本では、苫小牧市、釧路市、八戸市は氷都を自認する。メディアとスポーツの関係には、メディアがスポーツに関与することによってスポーツが普及したという側面もある。苫民の事業活動はアイスホッケー、スケート大会を主催等して、言論・報道活動では氷上のスポーツを報道したり論じたりする。しかし、その活動が苫小牧を氷都にしたというようなメディアの影響力を過大に強調する議論は、メディアとスポーツの関係をあいまいにする。なぜならば競技団体が設立されたり、自治体、地元企業がスポーツ施設の維持管理を通じてスポーツ環境を整備したというようなスポーツ界の影響力も当初は決して小さくないからである。このように「苫小牧＝氷都」という問題は、メディアロジックに従ったり、スポーツロジックに従ったり、と一定の様態ではない。それがメディア界とスポーツ界の間に相互作用と相互依存が生じて、スポーツ界におけるメディアの重要性が大きくなり、スポーツ界がメディアに段々依存する傾向に変化し進行すると、スポーツのメディア化という長期的な過程になる。

創刊直後から苫民とスポーツの関係はみられたが、その関係は疎遠であり、当時、スポーツ記事が紙面に載るのは特別なスポーツイベントがあったときに限られた。1960年代には、今日まで続く自社スポーツイベントが萌芽して、苫民はイベントの模様を報道したが、当時、スポーツジャーナリストはおらず、スポーツ記事は報道部記者が持ち回りで書いていた。一方では、国家レベルの基本的な法律としてスポーツ振興法が1961年に制定されて、苫小牧市は1966年に日本で初めてスポーツ都市宣言を表明した。翌年には苫小牧ハイランドスケートセンター（現在、苫小牧ハイランドスポーツセンター）がオープンした。他方では、王子製紙スケートセンターが1955年に竣工した。また王子製紙硬式野球部は都市対抗野球大会（1959年、1966年）に出場、同アイスホッケー部（現在、王子イーグルス）は四冠王（1963年）、五冠王（1965年）を達成するなど企業スポーツが盛んになった。盛大な企業スポーツは、苫民にニュースを提供した。こう考えてくると、結局のところ、スポーツイベントの開催という新聞社の事業活動は、自治体と地元企業が整備したスポーツ環境を基盤にしており、当時のスポーツジャーナリズムもスポーツ次第だった。このように、苫民は概してスポーツ界に依存しており、「苫小牧＝氷都」という問題はスポーツロジックに支配されていた。

スポーツジャーナリズムが萌芽すると、メディア界とスポーツ界の関係性は相互作用関係と相互依存関係に転じた。スポーツ面が紙面に登場してからスポーツ記事が毎日掲載されるようになり、スポーツをする一般市民が紙面に載るようになったことは、スポーツ界が新聞を意識するきっかけの一つになった。さらにスポーツ部が発足すると、スポーツジャーナリズムはより一層活発になった。記者集団がスポーツに専従するから、さまざまなスポーツを取材できるので、従来のアイスホッケー、野球ばかりでなく、市民各層の健康づくりを目指した生涯スポーツの話題や情報も提供するようになった。

スポーツジャーナリズムが発達して、スポーツにおけるスポーツジャーナリズムの重要性が大きくなった結果、スポーツの

⁹高橋義雄「メディアとスポーツ選手の変容」『21世紀スポーツ大事典』、前掲、p791。

コミュニケーションの仕方には変わったところがある。たとえばローカルなスポーツジャーナリズムには、新聞に名前が載ることがスポーツをする人の励みになる¹⁰という言説がある。従来、競技スポーツでも小さな大会、生涯スポーツの話題や情報の伝わり方は、概して選手本人とスポーツ施設に居合わせた人同士の会話、小さなグループ内で読まれる会報などだった。そこに新聞がスポーツをする一般市民の姿も紙面に取り上げると、スポーツのコミュニケーションはマス・メディアに媒介された。それは、当事者が自分の名前が載った記事を切り抜いて保存したり、その記事を人に見せたりするところがあり、苫小牧アイスホッケー連盟会長 石橋弘次は、郷土紙が「さまざまなスポーツを取り上げることが、スポーツの振興とか、子供たちが取り組むということに、すごくインパクトがある」¹¹と指摘する。

メディア化には直接的なメディア化と間接的なメディア化がある¹²。まず直接的なスポーツのメディア化は、個人間のコミュニケーションから新聞記事に置換する過程である。たとえば会話と新聞記事は、いずれもその試合結果や個人成績を伝えるが、新聞記事には異なる機能がある。それは、記事が載って多くの人に知られること、記事を保存して後で読み返せることなどである。これらの機能は、スポーツの振興を助けるからスポーツ界に段々影響を及ぼす。つぎに間接的なスポーツのメディア化は、メディアロジックがスポーツの形式、内容、組織、背景に影響を及ぼす過程である。たとえば市内のスポーツイベントは、スポーツジャーナリズムが発達すると、もはや単なるスポーツの経験ではなくなった。それは、新聞にスポーツ記事の素材を提供することも含意する。スポーツイベントは、スポーツ界にとってスポーツをするという機会であると同じように、スポーツ記事を通して活動の紹介と普及を推し進めるための機会も意味する。例をあげていえば、「苫小牧=氷都」という認識は、以前、個人の実体験が主たる源泉であったが、スポーツジャーナリズムが発達したので、スポーツ界がメディアロジックに従うようになり、アイスホッケー記事の掲載が常態化すると、新聞から得られる情報と個人の実体験が混ざり合っ、それは、苫小牧がアイスホッケーの盛んな土地という印象を与えていると推察できる。なぜならば、近年では、競技人口が減少して、自治体の財政難と企業スポーツの衰退を背景にスケート場のいくつかが縮小・閉鎖したにも拘らず、依然として氷都という認識が健在だからである。このように「苫小牧=氷都」という問題は、はじめスポーツロジックに支配されていたが、地域スポーツのメディア化の程度が高まるにつれて段々メディアロジックに支配されるようになった。

ここまでの議論を踏まえて、スポーツジャーナリズムの機能と役割は、時代と共に変化していることがわかった。現在のスポーツジャーナリズムの機能には、新聞が住民同士の交流を助けるメディアとして、地域のスポーツコミュニティの形成や維持、スポーツ文化の発展を支える働きがあると考えられる。他方、その役割には、全国紙などのスポーツジャーナリズムからこぼれ落ちた地域スポーツを掘り起こし、スポーツをする人々を喜ばせること、地域住民に話題を提供することが期待されている。また地域スポーツ文化の伝承者として、スポーツレガシーを維持することも期待されていると考えられる。

このような機能と役割は、ある程度まで郷土紙に共通している。しかしスポーツジャーナリズムの機能と役割は、その土地の地域スポーツのメディア化という長期的な過程のなかで決まるから一つとして全く同じものはないのではないだろうか。

本研究は、地域スポーツのメディア化の程度が高まる過程のなかで、地域スポーツが従わなければならなくなったメディアロジックのうち、①スポーツジャーナリストの誕生②スポーツ欄の新設③スポーツ専門部署の発足という「専門性」から構成されるメディアロジックを検出した。これは、ローカルなスポーツジャーナリズムの発達に顕著な影響を及ぼしたこともわかった。他方、その他の要素から構成されるメディアロジックを確認できるだけの十分な知見は得られなかったが、これもスポーツジャーナリズムの発達に影響を及ぼすと推察できる。これらは今後の研究課題として取り組みたい。

主要参考文献

- James Toney, *Sports Journalism The Inside Track* (London: Bloomsbury Publishing Plc, 2013)
 Kathryn T. Sifer, *Sports Journalism: An Introduction to Reporting and Writing* (Plymouth: Rowman & Littlefield Publishers, 2009)
 Knut Lundby, *Mediatization Concept, Changes, Consequences* (New York: Peter Lang Pub Inc, 2009)
 Phil Andrews, *Sports Journalism 2ND EDITION* (London: SAGE Publications Ltd, 2014)
 Raymond Boyle, *Sport Journalism Context and Issues* (London: SAGE Publications Ltd, 2006)
 Rob Steen, *Sports Journalism: A Multimedia Primer* (New York: Routledge, 2015)
 Stig Hjarvard, *The Mediatization of culture and Society* (New York: Routledge, 2013)

¹⁰ 『苫小牧民報』2010年10月5日付。

¹¹ 『苫小牧民報』2010年10月5日付。

¹² Stig Hjarvard, "From Bricks to Bytes: The mediatization of Global Toy Industry," in Bondbjerg, I. and Golding, P. (eds) *European Culture and The Media*, Bistol: Intellect, pp43-63.